様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ０５５６０・１９Ｋ２０７７０

研究課題名（和文）ピアノ・レッスンに関する質的研究：ゴールドベルク山根美代子の音楽的語彙を例に

研究課題名（英文）Qualitative research on piano lessons: Musical Vocabulary of Miyoko Yamane-Goldberg

研究代表者
後藤　友香理（Goto, Yukari）

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：１０７３２９５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、プロの演奏家養成を目的とした高度に専門的なピアノ・レッスンにおいて、どのような音楽的やり取りが行われ、弟子の音楽理解へとつながっているのかを明らかにするものである。ピアニスト・指導者であったゴールドベルク山根美代子（1939-2006）のレッスンを対象とし、レッスンの分析および弟子たちへのインタビューを通して、本来言葉にすることの難しい演奏解釈というものを、指導者が独特な言語表現を用いて弟子に伝えようとしていたこと、そして弟子たちが言葉の理解（知性）と身体を通した理解（感性）の両面で師の演奏解釈を吸収していく過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
クラシック音楽の演奏研究の蓄積は作曲家・作品研究と比べ圧倒的に少ない。そもそも演奏が一回的な性格を持ち研究対象となりづらい点に加え、演奏解釈が個人の感性に基づいて作品に付け加えたものに過ぎない、とみなされてきたことが要因である。しかし実際には、楽譜に書かれざる演奏解釈や演奏習慣が師から弟子へと口頭伝承される中で演奏の歴史は形成されており、本研究におけるレッスン研究により、言語化しづらい演奏解釈の教授プロセスの一方法論を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify what kind of musical exchanges take place in highly specialized piano lessons for the purpose of training professional performers, and how they lead to the pupils' musical understanding.The project focuses on the lessons of Miyoko Goldberg-Yamane (1939-2006), a pianist and teacher. Through the analysis of her lessons and interviews with her students, we learned that the teacher tried to convey her interpretation of her performance, which was originally difficult to put into words, to her students by using unique linguistic expressions, and that the students absorbed the teacher's interpretation both through verbal understanding (intellect) and through physical understanding (sensibility).

研究分野：演奏実践、クラシック音楽における演奏の教授について

キーワード：ピアノ・レッスン　演奏解釈　質的研究　演奏　楽譜

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様 式 Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

本研究は、演奏家養成を目的とした高度に専門的なピアノ・レッスンにおいて、どのような音楽的やり取りが行われ、弟子の音楽理解へとつながっているのかを、社会調査の手法を用いて明らかにするものである。ピアノ・レッスンでは「わざ言語」とも言うべき、感覚を共有するもの同士でないと通じない特殊な言い回しが多用されている。特に、本研究で注目するゴールドベルク山根美代子（1939～2006、以下山根）は、自らの演奏解釈を言語化し相手に伝えることに心血を注いだピアノ教育者であり、「音楽的語彙」を研究する上でふさわしい指導者であると判断した。

初年度となる 2018 年度（平成 30 年度）は、山根の音楽的バックグラウンドおよび指導歴を整理し、分析材料となるレッスンの録音資料の収集を行った。さらに、レッスン内容を逐語化し、質的分析ソフトウェア（MaxQDA）を使って内容分析を行った。その結果、山根の指導者としての個性や指導の観点を抽出し、「指導言語」というタームを用いながら説明することができた。

山根の発する指導言語は、楽譜に印刷された音の羅列の裏にある、作曲家の特徴を見出さそうとした結果生まれた言葉であり、それは和声やフレーズの構造、時代の様式といった自然な音楽的欲求に裏打ちされた演奏解釈である。そして弟子たちは、山根の指導言語の根底にある意味を読み解く作業を通して、本来言語化できない音楽の本質を認識し、それを理解しようと自らに問い直すことで音楽的な成長を遂げていた。この成果は、論文（『東京音楽大学大学院博士後期課程 2018 年度博士共同研究 A 報告書《モデルと変容》』）で発表した。

2019 年度は、前年度に引き続き山根のレッスン内容の分析を行ったほか、山根の弟子たちへのインタビュー調査を行った。ベートーヴェンの《ピアノ・ソナタ第 1 番》作品 2－1 を題材にした山根のレッスンを質的に分析し、その特徴を理論化した後、山根の弟子たちへのインタビューを KHCoder を用いて定量的分析にかけ、質的分析で得た仮説の検証を行った。その成果は、国内学会（日本音楽表現学会 第 17 回大会）で報告している。

また、我が国のピアノ教育の歴史を概観するため、明治時代の音楽雑誌を調査し、その中のピアノ教育の記事を分類、精査した。その成果は論文として『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）第 70 号』に掲載した。この他にも資料収集を行い、山根自身の演奏の録音、雑誌および新聞の執筆記事を収集・整理した。

なお、本研究と直接的な関係は薄いが、本研究で使用している質的分析の手法を応用して、中学校音楽科における鑑賞授業に関する論文を『静岡大学教育実践総合センター紀要 第 30 巻』に発表した。専門家養成のピアノ・レッスンにおいても、学校教育における音楽の鑑賞活動においても、音楽をより良く理解して相手と共有する上で、言葉によるやりとりは必須であり、「音楽の言語化」というテーマにおいて、本研究で用いている手法は有効であると

考えられる。

1. 研究開始当初の背景

ピアノ演奏の教授には、初心者であってもプロフェッショナルであっても、師から弟子への「レッスン」の形態が伝統的に用いられている。このうち、子どもや保育者養成課程の学生などピアノ初心者を対象にしたレッスンについては国内外で多くの研究が行われている（Budai 2008 など）。しかし、プロの演奏家養成を目的としたレッスンで、どのようなことを、いかに教授しているかについての実際的な研究が進んでいるとは言い難い。

指導者によってピアニストをいくつかの系譜に分類することもあるほど、師が弟子に与える音楽的な影響は大きい。音楽家にとってのレッスンは、その場における技能の習得や向上（テクニック）にとどまらず、異なる楽曲を理解し仕上げる過程（音楽解釈）、音楽家としての生き方（音楽観や心構え）など多様な意味を持っている。指導者自身によるピアノ教本や弟子による回想録などが出版されているが、それらで知ることができるのはあくまで言語化できるレッスンの一部である。実際のレッスンは、当然のことながら音を介して行われ、言葉を用いたとしても感覚を共有する者との間でしか通じないある種の「わざ言語」（生田、北村　2011）ともいうべき特殊な語彙が用いられている。その上、多くの場合レッスンはマンツーマンで行われており、そこでの内容が客観的な分析対象となることは音楽という特性上も密室性という特性上も困難であった。

2. 研究の目的

2019 年度までの研究により、研究対象者である山根のレッスンの特質や弟子たちへ与えた影響についてはある程度明らかになった。しかし本研究で目指しているのは個別の事例を挙げてその特徴を示すだけでなく、レッスンそのものの教授プロセスを明らかにすることであり、より包括的なモデルを示すことである。そのため、2020 年度は研究の見直しを行い、まずは①山根の音楽解釈を演奏史の中で捉え直した。さらに、②他分野の身体技能の教授プロセスについての文献調査を行った。

①については、これまでの分析で明らかになった山根の音楽解釈を、過去の音楽理論書の記述に照らし合わせ、山根の音楽観が西洋音楽の演奏史の中でどのように位置づけられるか検討した。その結果、演奏を言葉や弁論と同義と捉え、楽譜を体系立てて読むことを重視していた山根の演奏観は、バロック時代の修辞学的な演奏習慣に則っている可能性が明らかになった。この成果については、第 18 回日本音楽表現学会大会で口頭発表を行った。

ピアニストを対象としたレッスン研究の例はまだ少ないが、スポーツや伝統芸道など他の身体技能では、人類学や認知科学的な側面から研究から進められている。②では、他分野の教授プロセスについてどのような手法が採られているのか調査した。

なお、本研究と直接的な関係は薄いが、本研究で使用している質的分析の手法を応用した研究成果として、第 12 回日本音楽教育メディア学会研究会にて口頭発表を行っている。

最終年度である 2021 年度は、クラシック音楽における演奏解釈と楽譜の関係を整理しつつ、演奏家にとっての「楽譜を読む」とう行為が時に楽譜から逸脱することや、楽譜に記されていないことまでも補う行為であることを確認した。また、伝統芸道など他の身体技能の研究で行われている認知科学的なアプローチを参考にしながら、学習者が頭と身体の両方を働かせながら指導者の教える内容を理解し、実現しようとする過程を明らかにすることができた。指導者は、本来言葉にすることのできない音楽的な内容を、独特な指導言語と自らの範奏によって学習者へ伝えようとする。学習者は、耳で聴いた指導者の演奏と指導言語の意味とを頭の中で一致させながら、今度はそれを自分の演奏で体現する。指導者は学習者の演奏を聴き、自らが伝えようとしたこととの違いをまた伝える。その繰り返しによって、学習者は指導者が伝える音楽的内容を、耳と手と頭を働かせながら次第に正確につかんでいくのである。この成果は『音楽教育メディア研究』第 8 巻（日本音楽教育メディア学会、2022 年 3 月）に発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 後藤友香理	４．巻 70
２．論文標題 明治期の音楽雑誌にみるピアノ教育	５．発行年 2019年
３．雑誌名 静岡大学教育学部研究報告．人文・社会・自然科学篇	６．最初と最後の頁 173-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 後藤友香理、横山知代	４．巻 30
２．論文標題 要素同士の関連に着目した鑑賞活動の実証的研究 ： ヴィヴァルディ《春》を題材として	５．発行年 2020年
３．雑誌名 静岡大学教育実践総合センター紀要	６．最初と最後の頁 115-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 後藤友香理	４．巻 -
２．論文標題 指導言語に見るピアノ指導者の特徴：ゴールドベルク山根美代子のレッスンに着目して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東京音楽大学大学院博士後期課程　2018年度博士共同研究A報告書《モデルと変容》	６．最初と最後の頁 63-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 後藤友香理	４．巻 8
２．論文標題 演奏解釈の口頭伝承 －ゴールドベルク山根美代子のピアノ・レッスンを例に	５．発行年 2022年
３．雑誌名 音楽教育メディア研究	６．最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 後藤友香理
２．発表標題 「演奏家の演奏スタイルと方法論　― G.山根美代子のピアノ・レッスンにおける修辞学的演奏表現を例に―」
３．学会等名 第18回日本音楽表現学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 後藤友香理
２．発表標題 「曲想と音楽の構造との関わりに着目した言語活動とその分析 ― ヴィヴァルディ《春》の鑑賞授業において―」
３．学会等名 日本音楽教育メディア学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 後藤友香理
２．発表標題 「演奏家による音楽解釈の言語化について　―ゴールドベルク山根美代子のピアノ・レッスンを例に―」
３．学会等名 第17回日本音楽表現学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究報告（計3件）

・後藤友香理「演奏家による音楽解釈の言語化について　ーゴールドベルク山根美代子のピアノレッスンを例にー」、『音楽表現学』第17巻、p.112、2019年

・後藤友香理「演奏家のスタイルと方法論 ―G.山根美代子のピアノ・レッスンにおける修辞学的演奏表現を例に―」、『音楽表現学』第18巻、pp.76-77、2020年

・後藤友香理「曲想と音楽の構造との関わりに着目した言語活動とその分析　―ヴィヴァルディ《春》の鑑賞授業において―」、『音楽教育メディア研究』第7巻、pp.55-56、2021年

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関